

英語絵本読み聞かせ技術向上のためのメソッド提案： 小学校英語教育で使える実践的技術を目指して

Proposing Methods to Develop Picturebook Storytelling Skill:
Some Practical Techniques Teachers can Use in Elementary School English Classrooms

早川 知江 HAYAKAWA Chie

0. はじめに

本稿は、小学校英語教育で英語絵本を活用する際の、教師の読み聞かせ技術向上を目指す研究の一環である。2020年度からは「外国語」が小学校で初めて教科化され、全ての児童が少なくとも3・4年生で「外国語活動」を、5・6年生で「外国語」を受けるなど、小学校での英語教育と、英語教育を担う人材の育成はますます重要性を増している。本稿は、その小学校英語教育の中で重要な役割をもつ英語絵本読み聞かせをテーマとする。

文科省が、外国語指導者に必要な資質や能力の1つとして、「感情を込めて絵本の読み聞かせができる」ことを挙げている（東京学芸大学 2017）ように、絵本読み聞かせは、小学校で英語教育を担当するために必須の技術とされている。同時に、英語絵本の有効性を指摘する研究や、その活用法の提案もさかに行われている（絵本利用に関する学術的研究については、小松・西垣（2007）、樋口（2005）、樋口・他（2017）などを、実践的な絵本活用法については、外山・宮下（2010）、外山・他（2010）、リーパー（2011）などを参照のこと）。

こうした流れの中で本稿は、現場の教師および小学校教師を目指す大学生の、実践的な英語絵本読み聞かせ技術の向上を目指す。特に、小学校教員養成課程（以下「小兔課程」）として筆者が名古屋芸術大学で担当している2つの科目、「外国語の指導法」（本学においては「外国語科指導法（英語）」）と「外国語に関する専門的事項」（本学においては「外国語（英語）」）の中で実践できる、読み聞かせ訓練法を提案する。

教育に相応しい絵本の読み聞かせとは、単に本文が淀みなく正しい発音で読めればいいだけではない。他にも、適切な問の取り方、声音の使い分け、子どもの興味を引く適切な声かけや補足コメント、子どもからの発話を促す問いかけなど、さまざまな技術を複合的に用いる。一般的な絵本読み聞かせ教本や幼児教育に関する手引書なども、効果的な読み聞かせのための多くのコツや技術を紹介している。それらの中でも、本稿は特に、「朗読するのではなく、子どもに話しかけるように読む」という技術に焦点を当て、教師あるいは教師を目指す小兔課程学生がそのコツを習得できるような訓練法を提案する。

第1節では、先行研究として、多くの読み聞かせ教本で挙げられている「読み聞かせの

ための技術」をまとめる。そして、特に本稿が「子どもに話しかけるように読む」技術に着目する根拠として、子どもとの「やり取り」が多い読み聞かせの方が子どもの英語力を伸ばすという先行研究を紹介する。第2節では、小免課程に属する学生が、英語絵本読み聞かせで抱えがちな課題を考察する。その際、日本語絵本と英語絵本に共通の難しさと、英語絵本に特有の難しさに分けて整理する。最後に第3節では、前節で見た「難しさ」を教師や学生が克服するための、段階的訓練法を提案する。具体的には、「子どもに話しかける」「やり取り」することを最初は意識せず、まず①本文を正確に発音できるようにする。②本文の音と意味を結びつけ、「どのような内容を話しているのか」を教師自身が意識できるようにする。③子どもに話しかけたい内容をあらかじめ考え、話し合う。④その上でやりとりを交えた英語絵本読み聞かせに挑戦する、というように、段階的に進む訓練法である。

1. 先行研究と問題の所在

1.1 読み聞かせの技術

まずは対象絵本を英語絵本に限らず、一般的に「絵本読み聞かせのコツ」として示されている技術を先行研究からまとめたい。ここでは、主に以下の5冊の読み聞かせ教本に記されている技術をまとめる：

- ・ 景山聖子『子どもが夢中になる 絵本の読み聞かせ方』廣済堂出版 2013 年
- ・ 恵泉英語教育研究会（KEES）編 村岡 有香、須藤 桂子、飯窪 実香 著『外国語活動で使える！読み聞かせ絵本&活動アイディア』（成功する小学校英語シリーズ）明治図書 2014 年
- ・ 代田知子『読み聞かせわくわくハンドブック：家庭から学校まで』一声社 2001 年
- ・ 徳永満理『よくわかる 0～5 歳児の絵本読み聞かせ』チャイルド本社 2013 年
- ・ 外山 節子 監修・著、入江 智子、坂井 邦晃、佐藤 貴子、渋谷 徹、藤澤 京美 著『小学校の外国語活動で成果を上げる 指導案付き 英語の絵本活用マニュアル』コスモピア株式会社 2010 年

上記の書籍には、知ってすぐに自身の読み聞かせに取り入れられるような具体的技術が多く示されており、大変参考になる。ここにそれらの具体的技術の一部をまとめる：

【日本語絵本・英語絵本に共通の技術】

[絵本の持ち方・めくり方に関する技術]

- ・ 絵本のカバーは外しておく（絵本を見せるときに邪魔にならないように）
- ・ 全てのページを一度しっかり開いておく（ページをめくりやすくし、見開き全体をしつ

かり見せられるように)

- ・ 透明な指サックをする (ページがめくりやすいように)
- ・ 絵本は真ん中 (背表紙の下) を支えてもつ。指が絵にかからないように持つ
- ・ 絵本はまっすぐに持ち、完全に開いて見せる (どの位置からでも見えるように)
- ・ 絵本が子どもたちの目線の高さか少し上にくるように持つ (見やすく、集中できるように)

[教師の立ち位置・子どもたちの配置に関する技術]

- ・ 自分の顔と絵本は離す (子どもたちの注意が教師の顔にいつてしまわないように)
- ・ 自分の背後に気が散るもの (窓) などがないように。飾りのない壁の前に立つのがベスト
- ・ 子どもたちどうしをなるべく近づけ、絵本を中心に扇状に座らせる (絵本が見やすい。かつ互いの反応がわかると親密感・連帯感が生まれる)
- ・ 会場全体に「W」の形で視線を送る (左奥→手前→真ん中奥→手前、右奥)。一画ごとに視線をとめて子どもと目を合わせる (教師が子どもたちをちゃんと見ているというメッセージを送るため)

[読み聞かせ前の準備に関する技術]

- ・ 知っている絵本でも下読みしておく。それにより、どれが誰のセリフか、どこでページをめくるかなどを確認しておく (声の使い分けを正しく行い、タイミングよくページをめくれるように)
- ・ 表紙の絵を見せながら、簡単な解説ややり取りをしてから読み始める (絵本の内容に興味をもたせ、物語を理解するための共通知識を導入するため)

[読み方に関する技術]

- ・ 小さな子どもには、作者名は伝えない (「作ったお話」と思わせないため)
- ・ 絵をじっくり見せる。本文のないページも、めくる前に充分に間を取る (子どもが絵をよく見て、自分で内容を考えられるように)
- ・ 本文中に難しいことばがあっても、勝手に読み変えない。難しい単語はまずそのまま読んでから意味を補足する (原文のリズムや音の美しさや尊重するため)

【英語絵本に特有の技術】

[読み聞かせ前の準備に関する技術]

- ・ 歌やチャンツを通して絵本のキーとなる単語や表現を導入し、言語材料の理解がほぼできてから読み聞かせに入る (全く理解できない絵本を楽しむことは難しいため)
- ・ 表紙の絵を見せながら、既習英語表現で簡単な解説ややり取りをしてから読み始める (絵本の内容に興味をもたせるとともに、英語を聞き取ろうとする雰囲気をつくるため)

これらの具体的技術は、すぐ実践に取り入れることができ、それだけでも読み聞かせの効果は大幅に向上するだろう。しかし、これらの教本で示されている技術の中には、習得により時間がかかると考えられる技術や工夫も含まれる。

その代表的なものとして、「絵本は、朗読するのではなく、子どもに話しかけるように読む」という技術がある。しかし「朗読しない」「話しかけるように」と言われても、それが実際にどういうことなのか、具体的にどうすれば良いのか、戸惑う教師（や、教師を目指す学生）は多いだろう。しかしこれは、複数の先行研究が共通して指摘する、重要な技術であると考えられる。一例として、景山聖子（2013）の書籍からの引用を見てみる（強調は早川による）：

子どもが膝の上でじっとしてくれない「読み聞かせ」をする方に共通することがあります。それは、読み手の大人が絵本だけ見て、上手に読むことに意識がいき、子どもを見ていないということがあるようです。そこで、「お子さんの目を見ながら話しかける」ことを試みてあげてください。なぜなら絵本の読み聞かせは、朗読ではなく、お子さんとの対話・コミュニケーションだからです。（p38）

子どもが喜ぶ読み聞かせは、「読みません」。読み聞かせは、子どもたちとの対話・コミュニケーションなのです。ですから、読まずに話しかけていきます。（p79）

同じ指摘を、外山 節子 監修・著（2010）も、「インタラクティブ（相互作用的に）」ということばを用いて、次のように記している：

絵本を読み聞かせるときのポイントのひとつは、インタラクティブに読み聞かせることです。絵本の内容について、子どもたちに問いかけ、子どもたちの反応を引き出しながら読み聞かせるのです。（p15）

また代田知子（2001）は、「聞き手の反応に注意する」ことに力点を置いている：

読み手が読むだけの一方通行ではいけません。聞き手の表情やつぶやきを捉えながら読み進めましょう。子どもの笑い声や息をのむ気配を受け止めて、タイミングよく「間」をとりながら続きを読むのです。（p52）

また、子どもの反応を引き出しながらいっしょに遊ぶタイプの絵本では、読み手ばかりが張り切るのではなく、子どもが積極的に参加したくなるような楽しい雰囲気づくりが大切です。（p44）

これらの引用はいずれも、読み手が一方的に本文を朗読するのではなく、聞き手の反応

を確かめながら、会話するように（＝話しかけるように）読み聞かせることの重要性を説いている。

また、それらの主張と全く同じではないが、「絵本はコミュニケーションの材料を提供する」という指摘も、結局は「絵本を通してコミュニケーションするのが読み聞かせの目標」であるという点で、同じことを指摘しているだろう：

また、絵本は「自分の思いを他者に伝えようとする」気持ちも引き出すと言えます。コミュニケーションをする上で大切なことは、伝えたい「内容」だと言えます。他者との対話は、何かを伝え合うことを意味します。伝える内容がなければ、コミュニケーションは成立しません。絵本は、そんな「伝えたい内容」を豊かに提供すると言えます〔中略〕。このような気持ちを、同じストーリーの世界を体験した他者（友人）と分かち合い、思いを伝え合いたいと思うのは自然なことです。（恵泉英語教育研究会（KEES）編 2014: 11）

これらの引用が共通して指摘する、「絵本は、朗読するのではなく、子どもに話しかけるように読む」という技術は、特に英語教育としての絵本読み聞かせにとって重要だと考える。次節でその理由を確認したのち、本稿の後半では、教師や教師を目指す小免課程学生がこの技術を獲得するための具体的な訓練法を提案する。

1.2 朗読せずに話しかける：読み聞かせにおけるやり取りの重要性

前節に挙げたさまざまな技術は、すぐに実行可能な具体的な提案から、読み聞かせ者の心構えに関わる抽象的なものにまで及ぶ。それらの中で、本稿が特に「絵本は、朗読するのではなく、子どもに話しかけるように読む」という技術に着目する理由は、絵本読み聞かせを英語教育の一環として位置付けた場合、「子どもとのやりとり」が英語力向上に直結するためである。それを示す先行研究の1つとして、萬谷（2009）を紹介したい。

萬谷は、小学校の授業における英語絵本読み聞かせ時に、教師と児童が用いた発話を調査した。そして教師の用いた発話カテゴリー（Yes-No疑問文・Wh疑問文・承認・言い換え など）と、その直後の児童の発話頻度の相関を見ることで、教師のどのような発話が児童の（できれば英語の）発話を促すか分析した。萬谷の調査の結果、最も児童の発話を引き出した（つまりその発話を教師がした直後に児童の発話が増えた）のは、児童の発言を褒めたり認めたりする Acceptance で、2 番目に児童の発話を引き出したのは、内容を問いかける Wh 疑問文、4 番目が Yes か No かを問いかける Yes-No 疑問文であった。このように、褒められたり、質問されると発話したくなるのは、直感的にも予想できるが、それが実際の調査で明らかにされたのは注目に値する。さらに注目したいのは、日本語による問いかけより英語による問いかけの方が、児童の英語による発話をより多く引き出したとい

う結果である。萬谷自身はこの現象を、「教師ができるだけ英語で話す努力が子供の英語発話の増加に貢献する（2009: 77）」とまとめている。

こうした研究は、英語教育という側面から絵本読み聞かせを見た場合、単に本文を朗読するよりも、教師が児童に「話しかけ」るようにして、適宜、補足や質問をはさみながら「やりとり」を促すことが、読み聞かせとして効果的であると同時に、英語教育としても効果的であることを示している。

しかし、「子どもに話しかけるように読み聞かせる」と言われても、何をどうしたらよいのか分からず、すぐには実践できない教師や小免課程学生が多いだろう。次節では、早川（2021）の研究を振り返りながら、特に小免課程学生に焦点を絞って、やり取りを含む読み聞かせのどこが難しいのか分析していく。

2. 訓練法の必要性：絵本読み聞かせで直面する課題

前節に見た「子どもに話しかけるような読み聞かせ」が理想だとしても、読み聞かせ者がそれを実践できるようにするには、訓練の必要があるだろう。というのも、日頃読み聞かせに親しんでいない場合、「子どもに話しかけるように」と言われても、そもそも、いつ・何を・どのように話しかけて良いのか分からない場合が多いからである。

このことは、小学校教師を目指す学生を対象にした調査でも明らかになっている。早川（2021）は、名古屋芸術大学人間発達学部 小学校教員免許取得課程科目「外国語科指導法」において、受講生に「教師役」「児童役」に分かれて英語絵本読み聞かせを行わせ、訓練のどの過程で英語のコメント能力が向上するか調査した（調査の具体的な手順・結果の詳細は早川（2021）を参照のこと）。

調査の手順は概略、以下の通りである：

1. 受講生による絵本読み聞かせ ①（訓練・指導前）
2. 手本となる読み聞かせ鑑賞
3. 受講生による絵本読み聞かせ ②
4. 既存の教室英語表現集を用いた、読み聞かせに使える表現の学習・暗記
5. 受講生による絵本読み聞かせ ③

上記①～③の3段階の読み聞かせで学生が用いた発話を比較分析することで、どの段階で学生の読み聞かせ能力が向上するか調査した。その結果は以下の通りであった：

- 読み聞かせ①では、本文朗読以外の発話はなし
- 読み聞かせ②（＝手本となる読み聞かせ鑑賞後）では、教師役は児童役学生の発話を引き出すような発話カテゴリーを使用

- ただし教師役学生・児童役学生の発話はほぼすべて日本語
- 読み聞かせ③（＝教室英語表現集を学習・暗記した後）で、教師役・児童役とも英語の発話が増える
- ただし日本語に比べて英語の使用頻度は低い
- 英語で発話する場合、同じ表現ばかりを繰り返し使用する傾向が見られる（例：褒めことばは常に Good! か Good job!）
- 必要な英語表現を思い出すまでに時間がかかる

読み聞かせ①が示すように、効果的な読み聞かせについてなんの訓練も学習も行わない時点では、学生の読み聞かせは単に絵本文の朗読にとどまった。しかし「手本となる読み聞かせ」を1度鑑賞した後すぐ（＝読み聞かせ②）に、教師役学生は児童役学生の発話を引き出すようなコメントを多く取り入れるようになる。ただしこの時点では、それらのコメントは日本語に限られた。次に、既存の教室英語表現集の中から絵本読み聞かせに使える表現を抜き出して学習・暗記した後（＝読み聞かせ③）には、教師役学生による英語の発話が増え、それに答える児童役の英語の発話も増えた（教師役学生の英語発話を模倣する場面もあった）。このように訓練が進むにつれ、徐々に児童の英語発話を引き出すような効果的な読み聞かせに近づいていくが、最終的に「必要な英語表現を咄嗟に思いつけない」「同じ表現ばかりを繰り返し使用してしまう」などの課題が残り、十分な読み聞かせ能力が身についたとはいえない。

本節では、具体的読み聞かせ訓練法を提案する前にまず、教師や小免課程学生にとって「子どもに話しかけるような読み聞かせ」の何が難しいのかを、この研究に基づき確認したい。以下では、日本語・英語絵本に共通する難しさと、英語絵本に特有の難しさに分けて論じていく。

2.1 日本語・英語絵本に共通する難しさ

早川（2021）でまず学生が直面した困難は、「絵本を読む中で、いつ・どこで・何を・どのように子どもに話しかければ良いのか分からない」という戸惑いである。日本語絵本の場合、もちろん絵本文の内容は理解できるのだが、読み聞かせ者が自分ひとりでしか絵本を楽しんだことがない、あるいはそもそも絵本というものの自体に日頃から馴染みがない場合、

- ・ 絵本の内容の中から何を質問すべきなのか、何を補足すべきなのか思い浮かばない
- ・ 思いついたとしても、朗読中いつそれらの「本文以外の発話」を挟んだら良いか分からない
- ・ 本文の「朗読トーン」からはずれて、どのような調子で「本文以外の発話」をしたら良いか分からない

という戸惑いが見られる。これは、少なくとも本文の内容が理解できる日本語の絵本でも起こることであるが、英語の絵本ではなおさらである。

2.2 英語絵本に特有の難しさ

読み聞かせる絵本が英語絵本の場合、また別種の困難が加わることとなる。それは、以下のような多様な難しさを含むだろう：

- ・ 本文の英語が正確に発音できない。スムーズに朗読できない。
- ・ 本文に意味が理解できない箇所・単語がある。よく考えれば分かっても、読み聞かせるスピードに合わせて即座に「意味を実感しながら朗読する」ことが難しく、自分が発音している英語の意味が自分でつかめていない。そのため、臨場感や感情移入に欠けた読み聞かせになってしまう。
- ・ 子どもに話しかけたい・問いかけたい内容があっても、それを英語で言うことができない。
- ・ 英語で問いかけを行っても、子どもがその英語を理解できず、反応が返ってこない。

次節では、これらの困難を踏まえて、英語絵本を「話しかけるように」読み聞かせるための段階的訓練法を提案する。

3. 話しかけるように読み聞かせるための段階的訓練法

本節では、前節で見た難しさを前提とし、それを教師や学生が克服するための訓練法を提案する。それは、最初から「子どもに話しかける」「やり取り」することは意識せず、段階を踏んで徐々に話しかけるような読み聞かせに近づけていくというものである。というのも、絵本の言語が英語の場合、そもそも本文を読むだけで一苦労という状態で、子どもに話しかける余裕を教師はもつことができない。そのため、本稿では以下のような段階を踏んでいくことで、徐々に「子どもとのやりとりを交えた読み聞かせ」に近づけていく：

- ① 本文を正確に発音できるようにする。
- ② 本文の音と意味を結びつけ、教員自身が「どのような内容を話しているのか」を認識しながら読み聞かせられるようにする。
- ③ 読み聞かせをしながら子どもに話しかけたい内容をあらかじめ考え、話し合う。
- ④ その上で「やりとりを交えた英語絵本読み聞かせ」を行う。

本稿は、教師または特に教師を目指す小免課程学生の読み聞かせ力を高めることを目的とするが、その中でも特に、小免課程科目「外国語の指導法」（本学においては「外国語科指導法（英語）」）と「外国語に関する専門的事項」（本学においては「外国語（英語）」）の

中で実践できる、英語絵本読み聞かせの効果的な訓練法を提案することを目指す。そのため、以下の訓練法の記述内では、「教師」は小学校教師ではなく、大学の小免課程授業の担当者を指し、「学生」はそれらの授業を受講する大学生を指す。

また、具体的訓練法を示すのに英語絵本文を例に引く場合は、小学校英語教育でもよく活用される、次の絵本（邦題『はらぺこあおむし』）を利用する：

Eric Carle. *The Very Hungry Caterpillar*. Philomel Books. 初版 1969 年；ミニブック版 1994 年 ISBN：0-399-22690-7

3.1 本文を正確に発音できるようにする

英語絵本の読み聞かせには、まず何より本文を正確に発音できることが必須である。これは、第 2 節に見た教師や教師を目指す学生が直面する困難のうち、英語絵本に特有の困難「本文の英語が正確に発音できない。スムーズに朗読できない」という課題に対応するための初期的訓練である。最終的には「朗読ではなく子どもに話しかける」ことを目指すにしても、肝心の絵本文が自信をもってはっきり発音できなければ、絵本の内容が伝わらず、読み聞かせ自体が成り立たない。

具体的練習方法としては、まず本文を 1 文ずつゆっくり丁寧に、教師またはネイティブによる音声 CD などに合わせて発音する。その際、意味の分からない単語、馴染みのない単語については単語レベルで正確に発音を身につけると同時に、意味も把握しておく、次節に見る「本文の音と意味を結びつける」活動がスムーズになるだろう。昨今は、ネット上の英語辞書を引けばネイティブ話者によるモデル発音が音声で聞けるため、発音記号が読めなくても単語の発音を身につけることは容易になっている。

1 文 1 文が正確に発音できるようになったら、それで終わりではない。絵本の本文は、韻や規則正しいリズム、反復のパターンなど、音として美しく楽しく聞こえるような工夫が凝らされていることが多い。そうした音韻的な工夫も踏まえて、ゆっくり、はっきり、正確な発音で本文が朗読できるようにすることが、この第一段階の目標である。例えば *The Very Hungry Caterpillar* であおむしがさまざまな果物を食べる部分の本文は、全て「On 曜日 he ate through 数字 果物, but he was still hungry.」の繰り返しである（和訳は早川による）：

On Monday, he ate through one apple. But he was still hungry.

（月曜日、あおむしくんは 1 つのリンゴを食べました。でもまだはらぺこでした）

On Tuesday, he ate through two pears, but he was still hungry.

（火曜日、あおむしくんは 2 つのナシを食べました。でもまだはらぺこでした）

On Wednesday, he ate through three plums, but he was still hungry.

（水曜日、あおむしくんは 3 つのプラムを食べました。でもまだはらぺこでした）

〔後略〕

この場合、1文1文がいくら正確に発音できても、テキスト全体の反復のパターンの面白さが伝わるように朗読できなければ意味がない。まず教師が上記のようなパターンを理解し、以下のように発音できるまで繰り返し本文全体を通して朗読練習する必要がある：

- ・ 反復部はなるべく抑揚や強弱のパターンも同一にし、繰り返しのパターンを強調する
- ・ 繰り返しつつ変化していく部分（曜日、数、果物の種類）は、ゆっくりはっきり強調して発音する

こうした工夫ができて初めて、「音韻的な工夫も踏まえて、正確な発音で本文が朗読できる」段階をクリアしたと言える。

3.2 音と本文の意味を結びつける

前節の目標が達成できたら、音と本文の意味を結びつける訓練に進む。これは、第2節に見た、教師や教師を目指す学生が直面する困難のうち、「本文に意味が理解できない箇所・単語がある。よく考えれば分かっても、読み聞かせるスピードに合わせて即座に「意味を実感しながら朗読する」ことが難しく、自分が発音している英語の意味が自分でつかめていない」という、英語絵本に特有の困難に対応するための訓練段階である。

このうち、単語レベルで意味を知らないものは、学生自身に意味を調べて覚えさせる（前節の発音練習の中でここまで済ませていると良い）。文レベルであれば、授業内で全員で和訳しあい意味を確認することができる。しかしそれだけでは、「読み聞かせるスピードに合わせて即座に「意味を実感しながら朗読する」」というレベルには至らない。

朗読しながら、同時に、自分が発音している英文の意味を把握しているという力は、実は朗読自体の質にも影響する。意味がわかって発音するからこそ、どのような抑揚で、どこを速く読みどこをゆっくり読むか、どこで間を取り、どの単語を強調して読むか、について適切な判断ができ、気持ちのこもった、そして聞いている側に分かりやすい朗読ができるのである。

それを可能にする具体的練習方法としては、本文の意味を確認する際、文全体をきれいな日本語にするのではなく、いわゆるスラッシュリーディング方式（英文の意味の切れ目ごとにスラッシュ（/）を入れ、文ではなく句単位で意味を把握していく読解法）で、前からどんどん意味をとっていきようにするのが有効だろう。以下に、*The Very Hungry Caterpillar*の一部を用い、「文全体を単位とした訳」と「スラッシュリーディング訳」を比較してみる：

【文全体を単位とした訳】

He built a small house, called a cocoon, around himself. He stayed inside for more than

two weeks. Then he nibbled a hole in the cocoon, pushed his way out and...

あおむしさんは、さなぎと呼ばれる小さな家を自分の周りに建てました。その中で2週間以上じっとしていました。それからさなぎを齧って穴を開け、身体を押し出しました。そして...

【スラッシュリーディング訳】

He built / a small house / , called a cocoon, / around himself./ He stayed inside / for more than two weeks. / Then / he nibbled a hole / in the cocoon, / pushed his way out / and ...

あおむしさんは建てました / 小さな家を / さなぎと呼ばれるものを / 自分の周りに。 / あおむしさんは中でじっとしていました / 2週間以上。 / それから / あおむしさんは穴を開けました / さなぎに。 / 身体を押し出しました / そして...

比較して分かるように、英語と日本語は語順が大きく異なるため、文全体をまとめて訳したものと、小さな塊ごとに意味をとったスラッシュリーディング訳とでは、訳の順序が全く異なっている。例えば、built（建てました）に相当する日本語は、文単位で訳すと、最初の文の末尾に来るのに対し、スラッシュリーディングでは文の比較的前に現れる（英語は主語のすぐ後に述語がくるため）。また、called a cocoon（さなぎと呼ばれる）というhouseの修飾部が、「うち」の前に来るか後に来るかも異なってくる。日本人学生にとっては、スラッシュリーディング訳は大変に稚拙で意味のとりにくい日本語に見えるかもしれないが、これが英語の語順に最も近い訳であり、つまり、「今発音している部分の意味をそのまま理解」した場合の意味の把握のしかたに最も近い訳といえる。

日本語訳を確認する段階からこのように訳しておく習慣をつけておけば、最終的に絵本を読み聞かせるさいも、小さな意味の切れ目ごとに順次意味を把握しながら発音していくことができる。

3.3 子どもに話しかけたい内容を話し合う

次に、子どもに話しかけたい・聞かしたい内容を受講生どうしで事前に話し合う訓練に進む。これは、第2節に見た、教師や教師を目指す学生が直面する困難のうち、複数の課題に対応するものである：

- ・ 絵本の中から何を質問すべきなのか、何を補足すべきなのか思い浮かばない
- ・ 思いついたとしても、朗読中いつそれらの「本文以外の発話」を挟んだら良いか分からない
- ・ 本文の「朗読トーン」からはずれて、どのような調子で「本文以外の発話」をしたら良

いか分からない

- ・子どもに話しかけたい・問いかけたい内容があっても、それを英語で言うことができない

最初の3点は日本語・英語の絵本に共通する課題、4点目は英語絵本読み聞かせに特有の課題と言える。

第2節に見た早川（2021）の読み聞かせ実践でも、効果的な読み聞かせについてなんの訓練も学習も行わない時点では、学生は単に絵本文を朗読するにとどまった。これは、日頃絵本またはその読み聞かせに慣れていない学生が、上記の課題に躓いて「本文以外に言うことがない」状態に陥ったためと考えられる。

本稿では、これらの課題に対応するための訓練が最も重要かつ時間を要すると考える。訓練法としては、子どもに話しかけたい・問いかけたい内容を受講生どうしで事前に話し合うことを提案するが、その際、何の手がかりもなしでは話し合いが進まないだろう。そこで、教師（この場合は、小免課程「外国語の指導法」「外国語に関する専門的事項」の授業担当者）が以下のような質問事項を記したワークシートを用いることを提案する：

- ① このシーンの絵を見て、ページをめくる前に子ども達に聞いてみたいことは何ですか。できるだけたくさんあげてください。
- ② このシーンの絵や本文に、わかりにくいところがありますか。あったら、子ども達に何を説明してあげますか。
- ③ 上記①の質問や、②の解説は、本文朗読のどのタイミングで発すると良いですか。またそれはなぜですか。
- ④ 上記①の質問や②の解説を、子ども達にもわかりやすいやさしい英語で言ってみましょう。

例えば、*The Very Hungry Caterpillar*の冒頭部、月と卵が描かれた部分を例に、学生からのどのような回答がありうるか考えてみる：

- ① このシーンの絵を見て、ページをめくる前に子ども達に聞いてみたいことは何ですか。できるだけたくさんあげてください。
 - ・これは何の卵か
 - ・月はどうして笑っているのか
 - ・今は何時か。朝か昼か夜か
- ② このシーンの絵や本文に、わかりにくいところがありますか。あったら、子ども達

に何を説明してあげますか。

- ・本文が難しくて、子どもに意味がわからないかもしれない。特に a little egg lay on a leaf (小さな卵が葉っぱの上にあります) の部分は lay (横たわる lie の過去形) という単語にも馴染みがない。
- ・日本語訳をするのは英語読み聞かせとして不適切だろうか。例えばジェスチャーで、a little egg と言いながら右手の親指と人差し指で楕円を作り、lay on a leaf と言いながら、それを左の掌の上に置く動作をすれば、葉っぱの上に卵が置かれていることが伝わるか。

③ 上記①の質問や②の解説は、本文朗読のどのタイミングで発すると良いですか。またそれはなぜですか。

- ・まずページをめくり、本文を読み始める前に「今は何時か。朝か昼か夜か」を聞く。子どもが「夜」と答えたら、なぜか聞くと月が出ていることを指摘するだろう。そこで「お月様が出ているね。笑っているね。どうして笑っているのかな？」と話を発展させていく。
- ・上記の質問を本文朗読の前にするのは、絵を見て時や場所などの状況を整理させることで、その後に聞く本文 (In the light of the moon… (月明かりの中…)) が理解しやすくなるため。
- ・本文を朗読し、必要なら上記のジェスチャーで意味を理解させた後、「何の卵か」を聞く。次のページをめくる直前に「何の卵か」考えさせた方が、答えが知りたくなり、次のページに興味をもてるため。

④ 上記①の質問や、②の解説を、子ども達にもわかりやすいやさしい英語で言ってみましょう。

- ・これは何の卵か… Whose egg is this?
- ・お月様はどうして笑っているのか… Why is the moon smiling?
- ・今は何時か。朝か昼か夜か… What time is it? Is it morning? Daytime? Night?

このように、ワークシートをヒントに互いにアイデアを出し合うことで、学生が個人個人ではまったく思いつかなかったことでも、徐々に「このようなことを聞いたら絵本の理解が深まる」「先が楽しみになる」「よりわかりやすくなる」というアイデアが出てくる。特に④の英語表現については、学生どうしで添削し合うと同時に、場合によっては教師が間違いを訂正したり (例えば「これは何の卵か」は、日本語につられて What egg is this? とする間違いが予測される)、あるいは「どのような英語が子どもにわかりやすいか」をレクチャーしたりするのも有効だろう (例えば、Wh 疑問文で子どもが答えられなけれ

ば、Is it morning? Daytime? Night? と Yes/No 疑問文に置き換えることで解答の選択肢を示すなど。子どもに伝わりやすい問いかけ方について、詳しくは早川（2024 年 刊行予定）を参照のこと）。

3.4 やりとりを交えた英語の絵本読み聞かせ

ここまで、以下のような段階を提案してきた：

- ① リズムや抑揚、韻のパターンなども含めて本文を正確に発音できるようにする。
- ② スラッシュリーディングによる「短い単位での意味の把握」を積み重ねることで、本文の音と意味を結びつけ、教師自身がどのような内容を話しているのか認識しながら読み聞かせられるようにする。
- ③ ワークシートを用いて、読み聞かせ中に子どもに話しかけたい・問いかけたい内容を学生どうしが考え、話し合う。

ここまで進んでくる中で、単なる「朗読」が、「子どもに話しかけるような読み聞かせ」へと近づき、教師は、子どもに聞き取りやすい発音で、意味を把握しながら感情を込めて、物語をより分かりやすく楽しくする問いかけを織り交ぜながら、読み聞かせることができるだろう。1 冊の絵本を適切に読み聞かせるだけでも、その準備には相当の時間と労力が必要と言える。

4. おわりに

ここまで、大学における小免課程科目「外国語科指導法（英語）」「外国語（英語）」の授業で実践できる英語絵本読み聞かせ訓練法について、最終的に「子どもに話しかけるように読む」ことによって、教師が子どもとのやり取りを引き出し、英語の発話力を伸ばすことを目標に具体的メソッドを提案してきた。

特に教員免許取得を目指す教育学部においては、学校現場ですぐに生かすことのできる技術を身につけることは、重要なキャリア育成の一環となる。今回は英語絵本読み聞かせという、小学校英語教育に重要な技術のうちの 1 つに焦点を当てたが、他にも教師に求められる教育技術は数限りなく存在する。それらに関して、言語理論に基づく実践的な提案が行えるよう研究を重ねたい。

参考文献

- Gardner, B. and Gardner, F. 著、松川禮子 監修、平松貴美子 日本語版翻訳・執筆『小学校ではじめて英語を教える先生のための 教室英語ガイド』Oxford University Press. 2005 年
- Ward, S. *Baby Talk*. London: Arrow Books. 2004 年
- 景山聖子『子どもが夢中になる 絵本の読み聞かせ方』廣済堂出版 2013 年

- 恵泉英語教育研究会 (KEES) 編 村岡 有香、須藤 桂子、飯窪 実香 著 (2014) 『外国語活動で使える！読み聞かせ絵本&活動アイデア』(成功する小学校英語シリーズ) 明治図書
- 小松 幸子、西垣 知佳子「インタラク션을を促す英語絵本の読み聞かせとその効果」『小学校英語教育学会紀要』(8) 2007 年 pp.53-60
- 佐藤 久美子『イラスト図解 小学校英語の教え方：25 のルール』講談社 2018 年
- 代田知子『読み聞かせわくわくハンドブック：家庭から学校まで』一声社 2001 年
- 東京学芸大学『文部科学省委託事業「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」平成 28 年度報告書』Retrieved from <http://www.u-gakugei.ac.jp/~estudy/> 2017 年
- 徳永満理『よくわかる 0～5 歳児の絵本読み聞かせ』チャイルド本社 2013 年
- 外山 節子 監修・著、宮下 いづみ 著『音のある音声絵本ガイド』コスモピア株式会社 2010 年
- 外山 節子 監修・著、入江 智子、坂井 邦晃、佐藤 貴子、渋谷 徹、藤澤 京美 著『小学校の外国語活動で成果を上げる 指導案付き 英語の絵本活用マニュアル』コスモピア株式会社 2010 年
- 早川 知江「小学校「外国語」「外国語活動」における絵本読み聞かせ技術の向上をめざして」『名古屋芸術大学研究紀要』第 42 巻 2021 年 p267-288
- 早川 知江「小学校における英語絵本読み聞かせのための教師用教材の提案」『Proceedings of JASFL』Vol. 18. 日本機能言語学会 2024 年 刊行予定
- 樋口忠彦 (編)『これからの小学校英語教育—理論と実践—』研究者出版 2005 年
- 樋口 忠彦、加賀田 哲也、泉 恵美子、衣笠 知子 編著『新編 小学校英語教育法入門』研究社 2017 年
- 文部科学省『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 外国語活動・外国語編』2017 年
- 文部科学省『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 外国語活動・外国語編』2017 年
- 萬谷隆一「小学校英語活動での絵本読み聞かせにおける教師の相互交渉スキルに関する事例研究」『北海道教育大学紀要 教育科学編』60 (1) . 2009 年 p69-80
- リーパー・すみ子 Sumiko Leeper『英語を話せない子どものための英語習得プログラム ガイデッド・リーディング編 アメリカの小学校では絵本で英語を教えている』径書房 2011 年